

## 平成 27 年の平和宣言について

### 1 宣言作成の基本姿勢

- (1) 「平和宣言に関する懇談会」での意見を踏まえ、市長が起草した。
- (2) 平和宣言の要素として、これまでと同様に、「被爆の実相」、「核兵器を巡る世界の状況」、「平和への誓い」、「核兵器廃絶に向けた訴え」、「被爆者援護施策充実の訴え」、「原爆犠牲者への哀悼の意」等を盛り込んだ。
- (3) 今年の平和宣言では、核兵器廃絶の取組への原動力となる信念を固めるために必要な行動理念を提示し、世界の人々、特に為政者に相互不信や疑心暗鬼から抜け出すために理念の転換を促す。行動理念としては「人類愛」と「寛容」を提示する。また、平成 23 年から平成 26 年に寄せられた被爆体験談から、理念に関連する思いを、被爆者のメッセージとして盛り込んだ。
- (4) 「広島をまどうてくれ！」という言葉を取り込み、原爆によって奪われた故郷や家族、身体や心を元通りにしてほしいという、叶わぬと知りながらも折に触れ、被爆者の心に蘇る悲痛な願いに触れ、被爆 70 年の今も続く被爆者の深い苦しき・悲しきを訴える。
- (5) また、昨年同様に、具体的な個別事象を一つ一つ言及するのではなく、全体を通し、市民や世界の為政者、とりわけ核保有国の為政者等が、核兵器廃絶や世界恒久平和の実現に向けて取り組み、外交・安全保障政策を立案・実行する際に、軸に置くべき基本的考え方を示している。
- (6) さらに、これまで同様、平和宣言を広く市民に理解してもらうため、出来るだけ分かりやすい表現に努めるとともに、原爆投下年月日、犠牲者数、日本人以外の犠牲者がいたことなどを示し、若い世代への継承も意識した。

### 2 宣言に盛り込んだ主な内容

#### (1) 被爆の実相

ア 被爆前、広島には、温かい家族の暮らし、人情あふれる地域の絆、季節を彩る祭りなどがあったこと、その全てが一発の原子爆弾で破壊されたことを示す。そして、きのこ雲の下で何万という人々が亡くなり、その年の暮れまでに 14 万もの人が亡くなったこと、その中には朝鮮半島や中国、東南アジアの人々、米軍の捕虜なども含まれていたことを提示する。

イ 辛うじて生き延びた人々も人生を大きく歪められ、深刻な心身の後遺症や差別・偏見に苦しめられてきたことを訴える。「広島をまどうてくれ！」という、故郷や家族、身体や心を元通りにしてほしいという被爆者の悲痛な叫びを盛り込んだ。

ウ 広島県物産陳列館として開館 100 年、被爆から 70 年の原爆ドームを前に、改めて原爆被害の実相を受け止め、被爆者の思いを噛みしめるよう促す。

#### (2) 核兵器を巡る世界の状況

ア 世界には、未だに 1 万 5 千発を超える核兵器が存在し、核保有国等の為政者は、核による威嚇にこだわる言動を繰り返していると指摘。また、テロリストによる使用も懸念されていると訴える。

イ 核兵器が存在する限り、いつ誰が被爆者になるか分からないとし、世界の人々に被爆者の言葉とヒロシマの心を受け止め、自らの問題として真剣に考えるように求める。

#### (3) 行動理念等

ア 行動理念

(ア) 被爆者の言葉は、辛く悲しい境遇の中で思い悩み、紡ぎ出した悲痛なメッセージであるとし、その心には、人類の未来を見据えた「人類愛」と「寛容」があると指摘する。

(イ) 私たちは「共に生きる」ために、「絶対悪」である核兵器の廃絶を目指さなければならないと訴える。行動を始めるのは今と強調した上で、署名や投稿、行進などの取組を紹介し、共に大きなうねりを創ろうと呼び掛ける。

イ 行動理念に関連する被爆者の思い

(ア) 当時16歳の女性

他人を大切にし、相手の立場や状況に心を配り、協力し合うことの重要性を訴える内容  
(引用箇所：「家族、友人、隣人などの和を膨らませ、大きな和に育てていくことが世界平和につながる。思いやり、やさしさ、連帯。理屈ではなく体で感じなければならない。」)

(イ) 当時12歳の男性

戦争の愚かさを指摘し、平和のために、思いやり、いたわり、愛など人間本来の温かい心情を大切にしよう訴える内容

(引用箇所：「戦争は大人も子どもも同じ悲惨を味わう。思いやり、いたわり、他人や自分を愛することが平和の原点だ。」)

#### (4) 平和への誓い

被爆70年、被爆者の平均年齢は80歳を超え、広島市は、被爆の実相を守り、世界中に広め、次世代に伝えるための取組を強化するとともに、平和首長会議の会長として、2020年までの核兵器廃絶と核兵器禁止条約の交渉開始に向けた流れを加速させるために、強い決意を持って全力で取り組むことを誓う。

#### (5) 核兵器廃絶に向けた訴え

ア 各国の為政者に求められているのは、「人類愛」と「寛容」を基にした国民の幸福の追求ではないかと問い掛け、為政者が、対話を重ねることが核兵器廃絶への第一歩となると訴える。そうして得られる信頼を基礎に、武力に依存しない幅広い安全保障の仕組みを創り出していかなければならないとし、その実現に忍耐強く取り組むことが重要として、日本国憲法の平和主義が示す真の平和への道筋を世界に広めることが求められると指摘する。

イ 来年の主要国首脳会議、広島での外相会合は、核兵器廃絶に向けたメッセージを発信する絶好の機会であるとし、オバマ大統領など各国の為政者に、被爆地を訪れ、被爆者の思いを直接聴き、被爆の実相に触れるよう求める。核兵器禁止条約を含む法的枠組みの議論を始めなければならないという確信につながると訴える。

ウ 日本政府には、核保有国と非核保有国の橋渡し役として、議論の開始を主導するよう期待するとともに、広島を議論と発信の場とすることを提案する。

#### (6) 被爆者援護施策充実の訴え

被爆者をはじめ、放射線の影響に苦しんでいる多くの人々の苦悩に寄り添い、支援策を充実すること、とりわけ「黒い雨降雨地域」を拡大するよう強く求める。

#### (7) 原爆犠牲者への哀悼の意等

原爆犠牲者の御霊に哀悼の誠を捧げるとともに、被爆者をはじめ先人が、核兵器廃絶と広島復興に生涯をかけ尽くしてきたことに感謝する。世界の人々に、決意を新たに、共に核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすよう訴える。

### 3 宣言文

別紙のとおり。(8月6日平和宣言開始後解禁)

(参考資料1)

平和宣言に関する懇談会の開催結果

(参考資料2)

平和宣言で引用した被爆体験談を書かれた方のコメント等